

# 保育における歌唱表現を考える

～保育者の記述から見えてくるもの～

加 藤 明 代

キーワード／ 子ども、教材、指導、歌唱活動

## I. はじめに

歌うことは、最も身近な音楽表現の手段である。それゆえ 歌の好きな学生を現場に送り出して、子どもとの楽しい時間を共有してほしいと願っている。本学の学生の多くは中学・高校時代に合唱祭などを経験し、普段から J-POP を口ずさみ、歌を楽しんでいる。しかしながら、一人で伴奏なしで歌うことには抵抗があるようで、実習を終えた学生でさえ、子どもの歌を歌うその歌声や表情は「楽しんでいる」には程遠く、その取り組む姿勢は必ずしも積極的ではない。

また少ない観察ではあるが、筆者自身が現場で接した歌唱活動においても「保育者と子どもたちが歌うことを本当に楽しんでいるのだろうか」と同様の疑問を覚えたことがある。それはどういうことに起因しているのだろうか。

そこで本稿では、子ども達の歌う姿を保育者はどう捉え、支えているかについて、質問紙調査の分析を通して検討することにした。

歌唱活動についての先行研究を渉猟してみると、例えば、今川（2001）や小杉（2008）、志村（2006 - 2008）等、その他多々あり、歌唱技能面での子どもに対する対応等、指導法に関する著述も多い。しかしながら本稿の調査は、特にそのほとんどが現場経験 10 年以上の先生方を対象にしたことで、長い経験に裏付けされた保育者の見方や考え方を得ることができたと思われる。そしてそこから、養成校における「音楽表現」とりわけ「歌唱活動」の内容や指導法を見直す手がかりを得ることが、本稿の目的である。

## II. 研究方法

対象： 平成 23 年 8 月 静岡県内の幼稚園教諭 115 名

方法： 質問紙調査

内容： 担当クラスについて、歌唱活動の様子や活動時に大切にしていること、及び歌唱活動において問題に感じていることを、自由記述で回答

## III. 結果と考察

歌唱活動で多くの保育者が大切にしていることは、子どもが「楽しい」「歌いたい」と思う気持ちであり、それを引き出すためにどのような教材をどのように援助・指導しているか、先生方一人ひとりの経験に基づいた内容を、以下の 3 つの視点で整理し考察していく。

### 1. 歌唱活動時における子どもの姿

2. 教材に関すること
3. 指導に関すること

### 1. 歌唱活動時における子どもの姿

どの年齢においても、好きな曲は「もう一回やって」と繰り返す子ども達である。

年少児は、保育者の歌う様子を真似ながら歌を覚えていく。その日の気分や気持ちによって、歌に向かう姿はいろいろである。年中児は、散歩など楽しい気持ちになると自然に歌い出し、友達と一緒に歌うことも楽しむようになる。さらに年長児は、知らない歌にも興味を持ち、いろいろな歌をみんなで楽しむ一方、友達と自分との比較から、歌うことに消極的な子どももいる。元気に歌うことが怒鳴りになってしまうといった課題もある。

以下、具体的に述べていく。

#### 年少児

- 乳幼児期においては、感覚器官の中でも特に聴覚の発達はめざましく、それは神経組織の発達に関わっているが、5歳には成人の約80%に達するという。そしてそれに伴って聴く力を育てていくことが歌唱表現の基盤となる。  
「全体のメロディーはあっと言う間につかんでいる」「なにげに聴こえてくる隣のクラスの歌を覚えてしまう」「異年齢の集団で歌うとき、年少には難しいと思った歌を、年少児がきれいに歌っていることに感動したことがあった」には、“聴く力の育ち”への保育者の驚きが表れている。
- 「私が歌うと、口元をじっと見つめ、一緒に口ずさもうとする」「歌詞が分からなくても耳でキャッチした言葉を自信を持って発しながら歌う」という記述からは、子ども達が好奇心をもって歌声に耳や目を傾け、模倣しながら歌う様子がうかがえる。
- 「言葉の発達が遅い子どもでも、身体がリズムにのっている」「ピアノの音を聴きながら、歌わずに身体だけリズムをとっていた子どもが、いつの間にか歌うようになっている」このように歌声が生まれるには、身体を通して音楽を感じる体験が大切であると言える。
- 『『こっとりはとってもうったが好き〜』とニコニコして飛び跳ねるように歌う』『身体を揺らしながら歌う』『目をキラキラさせて歌の中の登場人物になりきって歌う』など、身体全体で音楽を感じながら歌う姿がある。
- 歌唱表現の様相については「曲の一部分のみを歌ったり」「知っている部分になると急に大声で歌ったり」「1番と2番の歌詞がごちゃごちゃになったり」「好きなフレーズを繰り返して歌う」という実態がある。
- 即興的に歌う子どもがいる。
- 「友達と顔を見合せて自分たちの声を楽しんでいる」「友達の声につられて歌い出す」「誰かが歌うと他の子も真似をして歌う」など、友達に触発されて歌う姿がある。
- 「知らない歌・聴いたことのない歌には消極的である」「興味や関心がない歌は覚えが悪い」「心配や不安な事などがあると歌わない」と、気持ちの変化に左右される傾向がある。次の事例をあげたい。「歌い始めると、一人の男児が寝転んでしまい、最初は何なのか理解できなかった。(中略)好きな歌を母親から聞き、クラスで歌ったところ、“ぼく知ってる”と言って近づいてきてくれて、だんだん歌の輪に入ってきてくれた」知らない歌・聴いた

ことのない歌には、その取り組みにも躊躇があり、歌の輪に入るには時間を要する子ども達である。

#### 年中児

- 「隣の友達と顔を見合せながら歌う」「散歩をしていて誰かが歌い出すと皆も合わせて歌っている」「子ども達は思いつくままにどんどん歌（即興の歌）をつなげていった」「歌のかけあいを楽しんでいる」など、友達と一緒に歌うことを楽しむ一方、「自分は周りの子より大きい声を出したいと思うのか、ピアノの音を聴かないで怒鳴るように歌う」のように、友達への意識が声にとってはマイナスに影響しているという記述がある。
- 「歌が下手だから」「音が上手く出せないから」「音が外れるから」と、歌うことに消極的な子どもがいる。ある保育者はこの状況をマイナス面で捉えるのではなく、歌の音高や自分の声に意識を向けて、その違いを認識できるがために歌えないという「音に敏感な子どもである」と記述している。しかしながら、「顔を真っ赤にして体をくの字にして声をはりあげる」のような問題もあり、「注意をすると、気にし過ぎて声が小さくなる」「口が動いていない」「歌うよりも動きまわっている」など、情緒面からも援助が必要な子ども達である。

#### 年長児

- 「少々難しい歌、長めの歌にも興味を持ち、“好き”と感じれば、すぐ覚えてしまう」
- 「一人ひとりにお気に入りの歌があり」「先生〇〇を歌おう」と毎日リクエストがあってクラスみんなで歌う」と、仲間と楽しむ姿がある。
- 「保育者の要求に応えようと、我慢して頑張ることができる」ほど、自分の気持ちや行動を調整できる子ども達である。
- 歌い易い音域や、好きなフレーズや、ノリの良いリズムの部分は、大きめに歌う。アニメソングなど音程やリズムが難しい曲は、ボソボソ歌ったり、「フフフー」と雰囲気でおどかさむ。また自分の好きなフレーズにこだわって、何度も繰り返して歌う姿がある。
- 友達と自分とを比較するようになり「自分をアピールするためか怒鳴ったり」、逆に恥ずかしさや照れ、失敗への不安から「歌わなかったり」「歌声が小さくなる」など、心理的な要因が歌声に影響している。「ふざけたり、怒鳴る」という記述は、年長児担当に多い。さらに「歌を自ら進んで歌う子が少なくなっている」「年少児では大きな声で元気に歌っていたのに、年長児になると歌声も小さくなりがちで、振りや身体を動かして歌う姿あまり見られない」という状況もうかがえる。年長児においてはこのように、歌に向かう姿勢に個人差が大きい。
- C Dから歌詞は覚えられるが、音程については不確かである。  
輪唱や掛け合いの歌も試してみたが、他の声につられてしまう。  
ピアノ伴奏がないと移調してしまったり、音がわからなくなる。

以上のような、歌唱能力に関わる記述がある。年長児では、音を聴いて合わせて歌う力が育ってきているので、ピアノが歌唱の支えになっている側面が見られる。一方、音程を認識して保持する力はまだ未熟であることがわかる。

保育所保育指針には、子どもの発達の様相について「直線的ではなく、行きつつ戻りつつし

ながら」とある。子ども達の歌う姿は、日によって、あるいはその一日の中でも同じではない。その時の興味や関心、保育者や友達、事物などの環境との関わりの中で、まさに「行きつ戻りつ」している多様な姿が表れていた。

## 2. 教材に関すること

年少クラスでは、主として保育者が曲を選択する。子どもが自信を持って歌えるように、その選択にも配慮があった。また保育者が即興的に歌いかける様子も見られた。

年中・年長クラスになると、保育者の方から様々なニュアンスの歌を提示するとともに、子ども達の歌いたい曲も積極的に取り上げる。年長児は知らない歌でも興味を持つが、その反面、アニメソングや歌謡曲などを一層好んで歌う傾向がある。

具体的には以下のようなものである。

### 年少児

- 音域が広すぎずリズムが単純である歌、繰返しのあるリズムカルな歌、子ども達の実体験のある親しみのある題材、歌詞がわかりやすくイメージしやすい歌、童謡、わらべうた、手遊び歌など、保育者が選曲する。
- 「伝承されている童謡は、速さもゆっくりで覚えやすく、母親と一緒に歌うなど、親子の触れ合いにもなり年少に適している」という記述もある。
- 保育者が即興で歌いかけ、会話形式で子ども達と一緒に楽しむ。
- 歌の輪に入ることができない子どもがいるときは、率先して、その子どもの好きな歌を保育者やクラスみんなで歌うこともある。

### 年中児

- 季節の歌などの童謡、物語性のある歌、友達とのかけあいを楽しめる歌、さらに楽しい歌・寂しい歌・速さのゆったりとした歌など、色々なニュアンスの曲を歌う。
- 「仲間とのつながりが深まり」「想像力が豊かになる」時期であることが、選曲にも反映される。

### 年長児

- いろいろなニュアンスの歌、子ども達一人ひとりのお気に入りの歌。
- アニメや商業ソング、ポップスなども歌うが、その扱いに戸惑いを感じている保育者もいた。
- 「音域に無理がなく、跳躍が激しくなく、時々楽しいリズムと印象に残るフレーズが入っている曲」「静かで穏やかな曲よりも、リズムカルな曲が受け入れやすい」など、子どもの歌唱表現の特徴を踏まえながら、曲の選択を心がけている様子がうかがわれた。
- 「他クラスから聴こえる歌にも興味を示すので、学年間で楽譜の貸し借りも多い」という記述もあった。

日常生活において子どもが耳にする音楽・歌はますます多彩で、歌謡曲など軽快でリズムカルなものに好みが偏る状況に、戸惑いのある保育者もみられた。だからこそ保育者自身が

様々な曲を知り、そこから選択する力が一層問われている。子どもの心情に働きかける音楽的な魅力を曲に見出す力である。そして、その歌を通して「何を育てたいのか」という信念をもって子ども達と向き合う姿勢が必要であり、その上でどのような指導ができるか考えられるべきであろう。例えば、その曲を歌うことで、音楽の躍動感などの特徴を感じてほしいのか、伸び伸びとした歌声を育てたいのか、そしてそれを歌唱教材としてじっくりと時間をかけて扱っていくのか、あるいは他の表現領域との関わりで扱っていくのかなど、保育者の指導観に関わることである。

### 3. 指導に関すること

指導法として、年少児から年長児まで共通していることは、「保育者が歌って聴かせた後、一緒に繰り返し歌いながら覚えていく」ということである。

年齢の小さいクラスでは「喜んで歌う」「楽しく歌う」ことを大切に、保育者自身が様々な場面で歌いかけ、子ども達の生活に歌がとけこんでいく環境をつくっていた。

年中クラスになると「音程の正確さを求めてしまう」と、声の指導に関わる記述もみられる。加えて、年長クラスでは「子ども達のリクエストで歌っていく」「互いの声を聴きあい意見を出しあい考える」というように、子ども達の主体性を重視している。

そして年中児・年長児と年齢が大きくなるにつれ、子ども達の楽しさ・喜びよりも音程・歌詞の正確さを優先させる状況があることへの反省や悩みもうかがえた。

以下、年齢別に述べていく。

#### 年少児

- 歌唱活動では、子ども達をピアノの周りに集めたり、みんなで輪になったり、ピアノ伴奏はせずにお互いの顔が見えるように子ども達と向かい合って歌う。このような配置によって、子ども達は保育者の歌う口元や表情を見ながら歌う。また保育者も歌う速さや高さを調整して歌いかける。
- 保育者が歌って聴かせる→ 一緒に歌う→ ピアノ伴奏で歌う、と段階を踏んでいく。
- 保育者自身が即興的に歌いかける。「散歩のときに」「挨拶の言葉のかわりに」「着替えや片づけのときに」など。
- 歌詞を覚えることについて、「1番を確実に覚えてから2番を覚える。覚えたことを沢山褒める。一つずつできると自信にもつながり、他の歌も覚えたいという気持ちにつながってくる」とある。「覚えさせる」ことも指導の重要な一部分になっているようである。
- 楽しい活動にするための工夫として、「身振りや手振りなどの動きをつける」「絵・ペープサートなどの視覚的教材を活用する」「具体物を示す」がある。これによって音楽のニュアンスや歌詞の内容を視覚を通して感じとれるようにしている。
- 一人ひとりが歌っている姿を褒め、「先生はこの歌が大好きだよ」などと言葉をかけながら、保育者自身も楽しく歌うことを大切にしている。

#### 年中児

- 歌唱活動における指導については、以下の記述がある。

・「繰り返し聴くことを通して歌を覚えていくので、子ども達に聴きとりやすいように、速

さや発音に気をつけて丁寧に歌う」

- ・「一緒に歌う楽しさが生まれてきている時期なので、保育者がリードして歌い、子ども達がそれにのってくるような活動を心がける」
- ・音程が外れてしまうことや、元気に歌おうとして怒鳴ってしまうことに対しては、例えば「保育者自身が歌い方や声の出し方を色々示す」や声かけなどする。

上記のことから「繰り返し聴くこと」と「一緒に歌うこと」は、歌唱指導の基本姿勢であることがわかる。その中で、子ども達が歌いやすい速さ・発音に留意し、さらには音程や発音に関わる技能面での援助もうかがえる。

- 「ピアノ伴奏で一緒に歌う」「子ども達を（私が）見える位置に座らせて、ピアノを弾きながら歌う」と、ピアノも活用している。
- 楽しい活動にするために、「身振りや手振りなどの動きをつける」「絵・ペープサートなどの視覚的教材を活用する」「具体物を示す」は、年少児と同様である。これによって音楽や歌詞のイメージがより膨らみ、表現遊びにつながったという報告もある。
- 展開の工夫として「友達との歌のかけあいを楽しむ」「歌の一部を替え歌にする」がある。
- 次の事例も注目したい。「子ども達が即興で歌っている歌を耳にしたとき、“あっ、面白い歌だね”と私が言ったことで、子ども達は思いつくままにどんどん歌をつなげていった」保育者の偶然に発した一言が、子ども達の楽しい気持ちを触発した例である。

#### 年長児

- 保育者の声やピアノの音を手がかりに、繰り返し歌うことで歌を覚える。
- 歌唱活動を支える楽器としてピアノが重視されている。「ピアノが不得手なので歌唱活動が苦手です」という記述からもそれがうかがえる。
- CDを活用したり、歌詞を覚えるために歌詞カード（文字）を利用することも多い。
- 楽しく歌うことに加え、子どもなりに歌詞の意味がわかってイメージがもてるよう、「その年齢にわかりやすい言葉で説明する」「保育者が歌って示す」など働きかけるほか、動きをつけたり、視覚的教材・具体物も活用している。さらにグループやクラス全体で「互いの声を聴きあい、意見を出し合う」機会を設けるなど、そこには子ども達の主体性を重視した活動がある。
- 保育者が選択した歌ばかりでなく、子ども達のお気に入りの歌を積極的にとりあげ、歌いたい気持ちを受け止めている。
- 年長であるがために、また発表会など行事に絡んで、その指導内容では、子ども達の歌う楽しさや気持ちよりも、音程・歌詞の正確さ、声の大きさや元気を優先させる現状がある。

以上のように「歌唱活動時における子どもの姿」は、加齢に伴い一層多様な様相をみせている。課題のある子どももいる。そこでは子どもの状況に応じた指導が行われていた。「声かけする」「保育者が耳元でやさしく歌いかける」「保育者自身が色々な歌い方で歌って聴かせる」「良い例や悪い例を示す」「歌声を聴きあうことで気づかせる」「上手な子どもとの配置を工夫する」「活動の参加を無理強いしない」「輪に入りやすいように、その子の好きな歌をみんなで歌う」「かけ声・手拍子を入れて、歌う以外で曲に参加させる」などである。

また、元気に歌おうとして怒鳴ってしまうことに対しては「ただ大きな声で歌うのではな



く、次の段階である“歌に気持ちを込められるようになる”ために丁寧な指導をしたい」という保育者の記述があった。保育所保育指針解説には「子どもの発達の順序性や連続性を踏まえ長期的な視野をもって見通し」ながら援助していくことの大切さが述べられている。まさに歌唱活動においても「長期的な見通し」の中で、それぞれの子ども達にどのような援助ができるのか、それを模索している現状が認められた。

さて歌唱活動においては、「聴く」とことと「歌う」ことは表裏一体である。互いに聴きあうということは、いろいろな声があることを知り、お互いを認め合うことに通じる。「聴く」ことについて興味深い事例がある。「年長児の発表会の曲を覚えさせるのに、ピアノが得意でないのでCDを流しておいた。ところが歌詞は覚えていても音程は不確かである。さらっと流れる感覚で耳を通り抜けてしまうからなのではないでしょうか」ざわついた環境は「聴く」には不適切であると考えた。歌声が育つためには「聞き流す」のではなく、心を傾けて「聴く」ことが必要である。子ども達の方から耳を傾けたくなるような声とは、それが目の前にいる子ども達に向けられ、歌いかけられる声である。

その意味においても、保育者が子ども達の顔や表情を見ながら共に歌うことは、年齢を問わず大切にしていきたい。「一緒に歌う」楽しさが生まれてきている子ども達である。その気持ちを共有できるように、向かい合って歌う方法も大切にしたい。さらに年長クラスになると、歌詞を覚えるのには文字に頼り、音程をとることはピアノ伴奏に頼るなど、安易な指導になりがちである。それは保育者からの反省にもうかがうことができた。子ども達の興味は、より複雑なリズムや音程の曲にまで広がるので、「間違えて子ども達に伝えたら」あるいは「間違っただけ子ども達に伝わったら」という不安もあろう。しかしながら歌いたい気持ちを引き出していく一番の環境は保育者自身であることを忘れてはならないと考える。

ある保育者は「“さあ、今から歌の時間です”“皆で歌いましょう”でなく、何気ない生活の中で、何気なく歌を口ずさみ、繰り返して歌う。そして子どもの方から“歌いたい”“この歌をピアノで弾いて”と言ってくるよう働きかけていきたい」と記している。また「どんな活動にも歌が登場します。朝も、こちらを向いてもらいたいときも、いつも歌っています」という記述もあった。即ちこれらは子ども側の生活の中に、歌う楽しさに誘い入れる機会を仕組んでいくことである。「歌が生まれる」そのきっかけは現場の中にたくさんあるはずである。それをキャッチして、保育者自身も楽しみながら表現できる力が必要である。

それでは歌唱活動を支える保育者自身の歌声についてはどうであろうか。保育者自身の歌う技術も大切にしたい。多くの記述にある「楽しんで歌う」は、微笑んで歌えばよいということではない。それは曲の魅力が伝わる、子どもの心をひきつける歌い方（声や表情も含めて）でありたい。様々なニュアンスを伝えられる声の技術である。そして確かな音程で歌うことができることも、楽しさを伝える上で基本的な歌唱技能である。

また子ども達への「声の指導」はどのようなものであろうか。前述のように視聴覚教材なども活用しながら、歌詞の内容やニュアンスのイメージを広げる工夫をしている。そしてそのイメージを手がかりに、「やさしくそーっと」「のびやかに」「なめらかに」「はずんで」など、その年齢に理解できる言葉で声をかけながら、声の指導に結びつけていくことが必要であろう。毎日繰り返して歌う中で、段階を踏みながら行っていくことを大切にしたい。しかしながら、

次のような問題がある。

年齢が大きくなるにしたがって、「声の大きさや元気さ」に加え、「音程や歌詞の正確さ」を指摘する指導になりがちであること、「年長児だから出来るはずだと、多くを要求してしまう」ことが保育者自身の気づきにあった。“5才ならこうあるべきだ”あるいは“こうあるはずだ”と捉えてしまうことによって、保育者の意識は、一人ひとりの違いよりも、上手な子どもに合わせようとする事に向けられる。そして誰が聴いても判断しやすい音程や声の大きさなどに“出来栄え”を求めてしまうようである。ある保育者は「クラスみんなで歌うので、一人ひとりの声がどうで、どんな音程やリズムで歌っているか、これまで意識していなかった」と自分自身の指導を振り返っている。すなわち、集団の歌声の中では、子ども達の歌声はいっぱひとからげに捉えられ、一人ひとりの声を聴く意識は薄くなってしまふ、ということである。「年長児でも音程がずれることに気づかなかった」という記述もあった。もちろん集団の中で培われるものもある。その特性と限界をわかって、一人ひとりの声にも耳を澄ましていかななくてはならないと考える。

「歌うこと」は、歌唱に関わる筋肉・器官の発達、及び情緒面や社会性や知的発達などと関わっている。そのためにこれらの発達が、伸びゆく声の可能性や表現意欲に、時にブレーキをかけてしまう。例えば、聴く力があってこそ音程や発声を意識することもできるのだが、そのことが「音が外れるから歌いたくない」「自分の歌に自信が持てない」と歌わない状況と呼び起こすこともある。「気持ちを込めて歌う」という歌唱表現のためには情緒面の発達が関わってくるが、その発達が恥ずかしさや照れといったマイナスの感情も引き起こす。また社会性の発達に伴い、仲間とのつながりが深まることによって歌う楽しさを共有し、一層歌うことに主体的になる姿がある。その反面、自分と他を比較して友達を意識しすぎるあまり、歌うことに消極的になるなど、マイナスな姿もみられる。このように、子どもの歌う姿は多種多様な側面を持っていると言える。そして個人差も大きいことが、指導の難しさにもつながっていると考えられる。

“目の前の子ども達の歌う姿をどう捉えどう援助できるか”“何が欠けているのか”“何を必要としているのか”——その対応には保育者の柔軟な感性が問われる。

#### IV. まとめ

以上、歌唱指導の在り方について、質問紙調査における保育者の記述から考察を進めた。保育者自身が楽しく歌う姿勢をもち、子ども達にどういふ歌・音楽をどのように出会わせていくか。その為一人ひとりの子どもの気持ちに寄り添った援助がいかに大切であるか。それらを痛感することになった。

今回の調査に際して「歌唱活動において」と質問したことで、集団における歌唱活動についての記述が大半をしめた。それは「子どもが歌う」ごく一部の姿でしかない。一斉という枠組みでは「今 子どもが歌いたいから みんなで歌うのか」というような子どもたちの気持ちへの配慮は難しい。とはいえ、子どもの自発的な表現に委ねるだけでは、歌声が広がっていく機会は多くはないであろう。それでは子どもの主体性を重視する現代の保育において、どのような援助が可能であるのか。保育者の記述からは、指導への自信というよりは、保護者への期待や自分自身の声のトラブルをかかえながらも「目の前にいる子どもの声を育てて



いく」という責任と向き合っている保育者の姿があった。

さらに、そこに表れた保育者の気づきや反省は、養成校の音楽表現に関連する授業を振り返ったとき、まさに筆者自身の気づきや反省を促す内容であった。例えば、声の技術指導についてである。子ども達の歌のモデルとして、音やリズムの正確さや発声などの技術面を育てていくことは大切である。しかしそのとき、学生のイメージを広げるような工夫や声かけを十分してきただろうか。授業という限られた空間や時間の中で、いつもの隊形で、お決まりの「こどもの歌」を習得させることに一生懸命になり過ぎていなかっただろうか。輪になり、隣の人と手をつなぎ、歌声が自然とはずんでくるような環境へ配慮ができていたのだろうか。歌を身近かに楽しく感じられるような指導法を学生が自分自身の問題として模索していく時間ももっと必要ではないか。これらを課題として、授業改善にいかしていきたいと思う。

## V. 参考文献

- 厚生労働省編 保育所保育指針 解説書 フレーベル館  
文部科学省 幼稚園教育要領解説 フレーベル館  
石井玲子編 (2009)『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』保育出版社、pp.31 - 34  
下村和男・西村政一編著 (1990)『幼児の音楽と表現』建帛社、p.9  
武田道子・加藤明代 (2009)「乳・幼児期の歌唱技能の芽生えを育てる歌声指導Ⅰ—実態調査の分析を通して」富士常葉大学紀要第9号 pp.85 - 99  
今川恭子 (2001)「子どもの『うたう』活動を支える保育者の視点—『音楽的な』思考パライムの再検討—」『保育の実践と研究』Vol.5 No.4、スペース新社保育研究室企画、pp.49 - 62  
小杉裕子 (2008)「みんなで歌う場面での表現する楽しさのある環境づくり」日本保育学会 第61回大会要旨集、p.449  
志村洋子(2006 - 2008)「保育者養成において学生に「表現」をどのように指導するか(2) - (4)」日本保育学会第59回大会要旨集 pp.S52 - S53、第60回大会要旨集 pp.150 - 151、第61回大会要旨集 p.116